

# 娘の不登校

県教育庁人権教育課長

田 中 耕 二



二年前、当時高校一年の娘が不登校になった。希望校に合格し、張り切っていたが、五月連休明けに登校できなくなった。毎日毎日、我が子が学校に行けず家にいる。そのことは、何をしていても小骨のようにひっかかり、心をぎゅっとしめつけた。

教員時代、何人かの不登校児童を担当した。家庭訪問をしたり、管理職やカウンセラーと対応を話し合ったりした。保護者には、家の関わりについてアドバイスした。その年に学校に復帰できた子もいたし、次の学年に送ってしまった子もいた。

振り返ると、自分なりに、不登校に対してしっかり取り組もうとしていたし、本人や保護者のつらい気持ちも分かっていたつもりだった。が、不登校の子どもの親となってみると、あの頃の子どもや保護者への声かけが、どこか「他人事」に感じられ、本当にあれでよかったかどうかあやしくなってくる。面談で、「お母さん、○○さんはきつと行けるようになりますよ」と励ます私の言葉を、母親は一体どう捉えていただろうか。

娘の不登校を経験し、当事者になって初めて分かることがあることに気付き、自分のこれまでの「他人事」感覚を反省する一方で、当事者にならずとも、つらい気持ちを受け止め共感するための想像力の大切さも身にしみている。忙しい中、何度も家庭訪問してくださった高校の先生、相談にのってくださったカウンセラーの先生、励ましてくれた職場の仲間など、「他人事」とせず、心から心配し声をかけ、支えてくださった。素直に感謝できる自分になれたのも、娘の不登校のおかげかもしれない。

今は通信制高校に在籍し、岡山駅前のサポート校に通っている娘と、毎朝一緒に通勤し県庁前で別れる。私服に茶髪、耳にはピアス、化粧もばっちりなので、かなり大人っぽい。「田中課長、朝から若いきれいな女性と歩いてましたね」と、にやにやしながら声をかけてくる同僚がいる。なんか勘違いしてるなと感じながらも、不登校を乗り越えた自慢の娘を誇らしく思いつつ、「うらやましいだろう」と答えることにしている。